14
4429
2

宮內廳書陵部

へ14特
4429
2

謝礼

4ゴ4

6

一周園の思轉 | 倫の背景 | 離宮城 |
天井のる魚誘の行列 | 河豚の倫発 | 鶴の舞料理 | 靖入者のお酒 | 玉手箱の お工産 | 混ッ巴 |

一行

□昔の例を由ると、これから又報恩の話、或は祝詞朗読、或は祝電発表があるよ、けれども、今日は総て廿場ち事は無い。唯の祝詞代読の無いのが最も氣持を良くする。

一行

□今度は三角中助が式壇を起て。

□えゝ、えゝ、宮は轉りもせず山と積積

て引下つた。

「これから如何なるのぬ。食堂は別に有るのぬ」と翁は中助に聞いた。

「まあ先生、見てゐる間に、一寸今日は高つれ過ぎですから、素寒の様に思はれる。」

と中助が答へてゐる間に、何処とも日本古代の絵巻絵巻が奏でられぬ。

□こゝから車でめて能の国園がグルッと廻転を始めた。

□林や、藤棚や、菖蒲や、撫子や、桜や、それ等が

次第に移り変り、海の背景と変つて行くのである。

□三幕人の素寒は岳掛りで、国園の背景が変つて行くのである。

「これは芝居の如く舞台を活用しれますで、皆電氣仕掛ですから、何んでも有りませんと中助は説明した。

□電氣仕掛と云へば、それ手でだけれども、何時それが出来るのでは、又甚だ手軽に行はれるので、翁は感嘆して、それを見入つてゐた。

□名ち堵は海底の堵は一寸ぐらい。
□一部は稲宮城の壕、城壁、城門などがハノテマ
風に畫いてある。
□素寳は皆黒素。
□稲宮は兄弟のは面白い。然るに今
海底は沈んでゐる。
□潜航艇の発明家は兄弟の海底の通りです
ちアル
□ロそは進ぐらくてゐる。
□いざ、出発は行ばゝる軍ぐんですぞ。

□いづれ、こゝるる砲向が有る事でせう。
□然らして棒は銘を掛けてあるが、食卓
を急ぐ指揮ぐ とゝ、却を古音ふ混雑を
ぐすぐすが
□ちんち拍子事はぐらいでせう。
□餘計な心配をしてゐる人もある。
□苟る波の音がしせん。
□何処やらで砲撃が聴えぜん。
□名ち天井から、勇敢の行列が下つて来る。
鯛、鰆、鰈、鮃、中は河豚もある。海老もある。

青き、赤き、樣々の魚鮮が群集して、次第々々に
重下して来て、銘々素寶の[redacted]
胸の辺まで来て、心ッ多り止
る。

□摸造品でいづれも習ひけるがぬくるまで来て
る。

□それは鍋片が附いてゐる。
同　隨意なお肴を山と盛
□摸造魚の背が薄く成つてゐる。それを見ると、
中ッ日本料理が詰めてある。肴も至て仕合せである。
同　ヤア　これは面白い

同　鶴宮料理　そでもいふのでせう
同　上ッ吊下つてゐるので、草ぶがゝるふ
いのは好い趣向ですね
同　酒は如何する
同　こゝも此と面白い趣向が有りませう
□いづれも興ッ入つてゐるれへ、上ッ蜻入
道が德利を持つて垂下つて来た。
同　蜻入道のお酌は骨響ですね
同　し本の今るハ本氣鍋ッを持ッて

猶ほいつれでせう。

□お人氣でありの。

□これで帰宅まで畑がとて、折角不老藥家へ帰って見ると、思ひ原形を復するんか悪で苦くってあるすが、無い西落ですぜ。

□悲ッ迫し家は今日は蒲団ばっ居る。

ナゴチ

呂宋

〈一行〉

新旧老人の比較研究——大多粉の博士——

憂の土を要せず——長生すれば恥多し——

裏面を着よ——若還って第一の運動——

□お待金を無事ッ終つた。

□それから又引続いて種々の金へ翁は引出されて、此所六モテの休である。

□今日は東京博士会ッ所研究ッ慈ッ愛ッ鞭ッ後帰って新旧老人比較

□博士の粉は非常ッ多数で、その殊ッ帰ッ日ッは古書ッ書ッ表的博士ッみが重ッ事ッ部ッ。これ。

トッの顔が描ッ。

□一方の新式老人と、比較は招ッ。

（曉白会でけすると、）不思議なる翁の面線で、反對黨の首領
として西名を天下に轟かしし黒白赤道
氏である。

□感情の激しき場合には、緑金色なり、金色なり、
現ずる。これ体ばけれども、それも互ひに国家の
為を思ひて奮つて今日に至る。
平の氏と赤の氏とは、
（敵）
□それより、互ひに一歩、子供の喧嘩とは違ふ
のだから、世間は笑つて黙つて別れた。

□が、相手の翁は研究舎の中に思ひて三角帽の一
室に落附いて見ると、何んだか厭な気がして
耐えられない。
□其の子供らしく、考へ出したが、彼と對照
された時は、彼の髪は黒く、彼は白く、彼の
声は太く、彼のは小。彼は痩せて長い人で
ある。氏方は腰が曲つてゐる。何時でも
彼の前に立つてゐるのを知つた時は、つくづく
悲觀せずにはゐられなかつた。
「如何で市在ましたれ」と中助は入来つて翁

問はけれ。

曰　や、[illegible]の[illegible]なんぞ事を無ぶいん。併し、博士の内で、不老薬を用ゐるとて、えがけの此健ふのは珍らしくも無く、偽仙を知て、いろ〳〵質問しれ人も有つたよ。

曰　先生、既う[illegible]翁は答へれ。

早速、例の暗藥をふさつて、治第は田てれ暗の四八、一本位注射ふさつれば、忽ち著く快成りるくつてるが……

曰　や、それを知て、三角君、私は既うそれは考へれ。

何ぼもあい様よ考へるのでふア。

曰　何ぼをも出ざるを出ずて、だつて、如何も世の中が現を想通りよ発達して、最早や仙薬先憂の士を要さふく成つてゐる。

（インスチチユーション 機関）

仙薬よ依つて日本帝国が世界の五朝者と成り、永遠の平和を見ることを得るよう上は、それで満足である。一言ふて云へば、わし等のやる事ぢやア無い。長生されば恥多しで、八十年菩提で仕方が無いで、什儘天命の盡きるまを待つ

と思ふ。

「何んでもまあ先生、そんな老人だ事をお考へなさるのが、ちと神経の一種の紙点がお有りなので。それは御心配イケません。まだそんな事では子がまをお樂しみ眼鏡をかけると許りしません。先生は大正三十六年の表面を見て驚ちさくなりましたが、其の裏面をおしるお目にお入れなさいませんか。」

「裏面？　それは暗黒な社会は最も

裏面が多い。偽善の醜態が頗る多いものだけれど、既に今日の日本は文明の眞髄を得て居るのだから、世裏面を知とへ見れば、憂慮するまでもなかぶまい

と思ふ。」

「然うですね。おっしゃる通りです。若さ折角市場朝まさつれのですが。」

「然うして先づ第一運動で市場見まさしし。」

「成程、成程。」

「そして、政府の招待會へ、医師で婦人ばかりの會合の様子を見ちさくなりました。

新

氣が高くて呼吸が苦しい。花瓶。そんな貴方、
あの十代で引退遊戯を
鉢を風呂場
同　なるほど。
穏やかを覚えたのでは……
早速　巡視官
は　ホンの筆術と、憤慨との
老薬の方は　巡視官で
同春
で……
□到頭　修甫翁
不老薬を服させる事と

あ。

4ゴチ　呂品

6　一高級巡視官―静義一週間―混乱の湾
狂薬の見つけ―動力を生じ―間違って発
吃驚して―苦痛を感ずる―秘密は
一行―意外は
同夫人

□問題　修甫翁
せっかくふのでは
人が助手を　二人車
□測頭　撰り洋鋼形の
様雑　ものを持って来れ
□診察、否、検査の後　高級巡視官は。
不老薬を服ま
巡視官の　内で　高級の
簡便　ものでは　無い。大分

□ これは何分、防腐剤が少し薬効のつよッ
すぎて、一服で効能が有りすぎる様な参
りすぎ、少しくすり一週間程お用みさせて、
其間はなるべく静養を願ます。それで一週
間目より一本注射を致
たです　同春

□ 不老薬、ホ號の三番薬を買ってエンe
公羽は早速、その結割をいろ入れて一ぱい
人参の様な色がしゝが少し濃くなる様
で有れ。

□ 紙巻を禁じ、酒を謝し、静養一週間。

□ 日ゝ日ゝ気持が快くなる様、外部肉が緊張し、
血液の循環が非常に良くなる様で、肥えて来る様
躰が一重を減じて来る様。

□ 第一、気の持方が違って来て、ぐっすり時代より寝
熟睡する様になる様に思ひます。早く日曜日の朝
が待ち遠しく感じる様。

□ 時を見ると、花樹繁が
曰、あゝ、今日は白髭が大分黒くなる様で
す。あゝ、お腹がすいた。迎びに来ても

驚いてゐる。

□一週間目の夕方は又高級紙屋が来た。

「さア今日は、いよ〳〵注射だ。

利目が薄い樣でしたから、玉の國立の醫院より特入院を

頼みます」と云つて注射を終つた。

「今後はこれで直ぐと快方へ向ふ樣ちやくのいづれ明

朝又此紙屋と一緒に来ます」と帰つて行つた。

□病状は其云ふが儘に早くのり寝室に入つて

眠りを待いたが少し興奮でなか〳〵氣持が悪く

て困つた。そこへ湯を呑んでゐる所へ何かを

飲んだ。

□其間とろ〳〵と眠つたかと思ふと、混乱した夢の

見つゞけである。無人島が清潔した時の光景が

出て来る記念會の宴會場の背景が

其所に展開すると思ふと、粉多の美女が整下

して来る。然るのと思ふと、それが何時の間にか

鹿の群と変つて了つた。風景の活動寫實を見て

ゐると、義太夫の甲板に立つた自分の姿がしす

代と成り、七十代と成り、六十、五十、後ろは前髪

社祢の小年姿と変つて、記念館の油畫額と混線した

る。

□夢は夢である。変化は肖像額のみである。

ト云。翌日の朝起きてんぐると、ガッと苦く成つて

ゐるのかと夢現の間にそれを嘗てみまして

みると、治薬をそよ胸が苦く[illegible]て耐らぬく

成つれ。

□今うまく嚥ませを催しそうに成つれ。

こんな薬毒でひで有つれのぢやア無くいか。こん

で私はゴンでゴンふのぢやア無くいがくらかの。それも

天命で仕方も無いが……苦く苦くそこは実

と遣切れない……折角腹んだ薬を皆吐出して

ゴンでゴンでゴンもを得んが前より

多く年を取つては困る……嗚呼苦く……

如何ゴンこ此は……山

□後ろは森林を踏りて宮内を歩き回つれ。

□その歩くのも後ろは陰を伝動力を出して猛虎

の鉄槍中で暴れ[illegible]くも陽熱に成つて来れ。

端は唯宮内を歩き回るのみでは耐切れぬく

成つて、千歩より治薬を[illegible]

なりして見ひく成つれ。

「間髪を発する瞬間である。

□「自覚」と呼びながら、苦痛を忘れる為は

□「テーブル」を持ち、揺るを指げ、書棚を動かし、

「ベッド」を寝台へ移す。

□「吃驚」して、中田と小一郎が進つて来た。コツ〳〵と扉をノックした。

「這入り給へ」と言葉は入ふんよ山と公羽は云ふ。

其声かすれて非常に高い。

□入来うと三角山ふる。

「あッ」と声を揃へて驚いた。

4 ゴチ

呂屯

6

―山ちゃんは賛成の意味―「鏡」を對して

―三十六七時代―「言ふ」を著く

―「成る新聖は」―「自分」で「本が賣せさふ」―

―翌日の朝をでこぶ手を表てそろひりせるの―

「ア能く寝て呉れた。苦痛の餘り発狂したのだ。ひろ弘んでちゃみの知れない。僅は狂は益を暴れるのだ。」

「先生！先生！」

「ちゃんです。但しいちゃんは慶

賀の意味での古語です。と中助が云つた。

「何んで賀賀だの？」と公羽は手を挙げて問ふた。

「その先生のお力はなかなかです。」

「お腰が直直しびれるぞ。」

「髪が強ど真黒です。」

「お鼻が一つも有りません。」

「元ッ。」

「正しい先生の男壮時と異りません。」

「元ッ。」

「眼鏡を掛け男覧なさること。」

「中助と小一郎とは両方の手を取つて押へた。」

「鏡の前へ連れて行つた。」

「わ――ッ。」と云つて翁は吃驚した。

「如何です先生？」

「驚いたろう。」

「いや、本統です。」

□ では、念の為め、捨てて呉れ給へ

□ おおきです。先生、捨てちゃくってる……

□ ぜひとも飲まる筈く成り過ぎれでは無いか。僕の三十六七時代

□ 酒なんか無いのです。いくら筈くお墨りなさるのって、二十の七十佐でーの男房りなは酒のくらい安くです。酒なんか筈る新藥は事ぜ政府で喜ぶ筈ちゃくなんですが。行ん

□ 記録ですー今夜は宿泊

□ 明日は酒のくらい。最高位秘書の出張

をこうして能く調査して置くこと

□ ぜひとも、君、今でさへ佐ちゃんが。翌日の朝まで静かの寝て居ること、十四歳の少年を矣て

□ 知れないい

□ すいません。有りがとうございます。では先ず電話で問合せて見て

□ 僕、早く御出て呉れ給へ

□ ないい

□ 小一郎が当いで宮殿へ出て後で公爵を元の通く眠らせるべく寝室を起さうとする、迎

中助は倒れてゐる

水

8 直ちに。鉄瓶が沸騰する。

曰 やゝ、それは僕が直すよ。

□ 翁は何の苦もなく元通りに直した。

□ 世話へ小一郎が電話で帰って来た。

曰 (必)祝宴の当直は悪い塩梅よ、今夕来た人が告りそうも……それは如何なる高蹟だと驚いて

居ました

曰 然るに

曰 備しかりぬく それは、不老薬を用ゐたいで、

九十一歳の高齢を保ち得られた程精力絶倫の

倫の所方が、それに石老薬の力を加へたるよ、

何世 普通の人が三十年若返る処を、四十年も

五十年も若返られたのだ。然う考へると他

も今の如研究のしようが無い。それで、安眠薬を

早速届けさせるから、明日の朝まで待つ

て頂きたい。世上で……と云ふ事でして

□ 世話へ早や服行機で配達さるとて、

薬袋を撫ぜ撫ぜ、

を持って帰れ。

曰 おやッと云って翁の変化を驚いてゐる。

□翌日の朝は、無邪気な皆さんが驚く事だろう。何しろ今夜は安眠熟睡を貪って勝りませう。やがて明るい朝を迎へて、家内の騒きと又喜びとは非常である。

□明るい朝を迎へて嬉しがる人達が、早や、の様に、若鶯の様に、囀りつゝ、花枝嬢で。

三月四日

4ゴチ

一葉が利き過ぎて、婦人達を驚ろかしてやり過ぎた。

一弘ど部人の感一

一軍事が無いので撮影せる塔紙館一

一老人珍らしは困る一

一五階の屋上から一直線一

一偶るは下りるお客一

一行

一行

□先生の三十代の肖像を記念館で拝見致しましたが、あれでは、市北健らしく、それから、あれでは、無邪気な云つて、綺麗で居るッてやるわと、ぬと云つて矣つた。

□では、花枝嬢の結婚を申しんでいたのか

□扨て和服は然で無いが、洋服と和服と、何れも同じくらい、洋服を呼ぶ、新調しなければ、靴を呼ぶ、靴を履きと成つた。

□其時へ紙屋が来て、調査の結果報告、人は高度の薬の効羽の目的が絆創膏は全く薬が効き過ぎたと分つた。

水

□ 叶若く成つれ此で、一ッ武内女史の歌」

今日は暫んで、帰りの幸を驚ろくさりたくるんが」と

公羽は之ぜ〳〵れ。

□ 肝の塵前り悲歌る傾いた爺とは殆ど別人の

感がある。

□ こんな偉い

新劇場の施設（インスペクション）の為である」

□ 爺は古喜び。

□ いよ〳〵新調の降服ちゃが調つれ此で、武内

女史の宅を訪問する事と成つれ。

□ 誰か出て来ると思ひきや〳〵と参りませう」と中間が

之つれ。

□ 古お方、ピン〳〵して居る。附添お

んて老人へ抱らをされては困るよ」と自る靴

を脱いで出て来れと。

□ では、駕籠を人力じますから、一寸お待ち

下さいまし

□ 成アる、歩行機で降山だよ

□ それ成ぶ門口まで出て来内を……」

□ 成アるそれ成ぶんよ」

□ で〻

武内女史の宅が出来る命ります

すまく」

□それは多張茅の山の手、確か麹町四番町で、靖国神社の後の方だと思ったが……

□その青山神社まで入ふ〜する金中の道が沿りで物凄い花ですね」

□京のてるもの山

□京ものは居りませんですか。それは成内さんの所で、悪い連絡が来って居りますす」

□では仕方が無い、案内して貰うとする」

□自動歩行機で小一郎の案内で東京の前は三角形とぱん。

□白髭の白髭の老翁が若く風ったので誰も嬉角翁とは知らぬそれ故先日までは先角人の白髭ってあれのが、ヘラヘラは擦違ってる平気で行ってるふ。

□此様なのと無意味内女史が驚くだろうと、それを繋ぎ合せて行った。

□丸陽紙を歩行機で登るのは一寸前ってる骨が折れる熱線が無くいのるで、此時ばかりは小一郎

手を引かれた。

□先づ清風神社を參拝した。

□遊就館は昔の儘である。其後軍艦が無いので、分捕品の陳列が増さるべきのである。

□大鳥さんへ行ってみる。ちんて少年が同行の為めに問うてある位。

□やがて武内邸に入る。

□訪問の時間は午後二時といふ キッチリ門前に着く。

□それでは、これで失礼致します。お降りなさい。

□又歩くのか……

□いや〳〵それでは余り遠く、一人でブラ〳〵

□降る

□山一郎さん別れて當邸は門内に入る。

□建築は昔と全然違ってるのが、[redacted]入口

ちんの昔が拝はる。のみならず、一向人の

影形が見えぬ。

□扉を開いて入る。

□玄関の電鈴を押さうとする

□此へ、玉階の屋上かゝる一直線に陽いてゐる急

な階子を、鉄の欄干を掴みて滑る如

く降りて来た一婦人がある。腰元を一番次の女中とくふ事が知れた。

曰貴様は、もう今日のお客様ではない

降参せんかと

曰あゝ私は嬉しくもない

曰あッちらの左様でございますか。

行儀で入ると

玄関の方へ

曰えッ屋上へ

正午のので、詰問は屋上からすると

上平

曰偶ては下から入るのいらっしゃる お客様ばかりでございますので、一寸お待ち下さいまし」と云ってお中は新しんぶん。御覧下さい。屋上へ室内電話を掛ける様な。

□問ふく例の名ある階を五階の上から駆降りて来る婦人の一

□貴先のは無縁 武内名刺を出せばなら成らぬのが、それが如何に一行か書

三九

6 今日集まった者は——旧式の表装を変更——復旧の復新か——名は知れて居ても——曾知る——顔——貴婦人の中に藝術——横ってふく撞手——藝術の向上は紳士の覚醒——

八一行

□降りて来る婦人は、どれも皆白髪あり胡麻塩髪の老婦人ばかりである。男親しいようでまた事の無い、お婆さんばかりだが、それが又如何しれのか、壮健とくくふるまひ、お婆さんで、平気で気を自分に陽ぶる駅降りて来た。

□眞先のが口をかして。

□まア嬉俺先生も、ちゃうお若くお成りあさいましためえ。

□其声は正しく武内の根ゑ女様ぢゃ。

□あッ武内さん！まア驚くれ私が若く成っ

たりも、貴女はまア如何しんのです。先日訃報が届でお目に掛ったれ時には、全然他年が違って見えます。もっとも方が順当■ちのでせうが……

□と前は何れ。

□実は先生！貴公羽を出奔遊ばしますのは、何か奇特な理由をと存じます。先日の雑宮の稽ふ仕儀は旧式の老人で居られ一人で参りません。其所で先生は一人で居られ、嘘お拵りが悪くて居られ、やっぱりと思ひます。……それは今日集まる者が強ふて旧式の先

□奮接間を通されて、女史連は皆何処へか行ってしまった。

□女中が茶を運んで行ってしまった処へ僕が相を解いて、復旧か復新かと、行人が一時に入来した。

□暑い時の顔びかり直ぐと其行人である。

○○女学校の校長さんで

曰やア貴女は人をあいすぎる……あッ喜ばれ

婆さん振る奮[illegible]相[illegible]そこで皆相手を致さうといふ申合せを致さうとしたのを一番皆持前の年の拾歳で今屋上玄関へおまつりへを致して居つれば時花さんは

曰あッそれはいけない……

曰でもせんせが然うお著くなる入ふいさッ

曰復旧致さうぬ

曰復新と云ふ方がはい位で

せうぬ

曰然うも知れませんこの方へ……

○婦人會の會頭……あッ、貴女は婦人記者ですね。有名な……おゝ、貴女は陸秀畫家の……やアー陸秀作家と陸秀劇作家とお揃ひで……よしー女優の第一期の方で……

□新内女史が紹介するまでもない。

□だが、名をきいてゐるのもあるでせう。

先生、まア、名聞がやアあるもんかと

後の方から声をかけ一婦人。

あッ、と、これは驚いたが。

□貴女はつゝ出ゆゝしくそれ申しまして……と羽は

恐縮して見た。

□まゝ先生、猫吉をお忘れあさつたの

□う……う……猫吉……

□品行方正の酒豪家では有つたが、それでも紳

士會を思ひ待合で聞いた場合は、酒の飲まぬ婦人

が藝妓が無いでも無かつた。猫吉も其一人で氣

性のあるもので、貴婦人でも有つた。

□そもが、貴婦人連の中も居ふことは思

はなかつた。

□強なる人の妻内女史の如きは、風俗婦正よ
執てはお[illegible]を[illegible]方で、藝妓を醜業婦とそ
公金を別せるまでもどの位反對に知れ
ぬので有ふん。

□そんなことを仰しやつて今日は式所へ招いれのゼ爲が
仰りぬ。猫吉の前身を知らぬのか。それは知て
ゆ[illegible]ゆ[illegible]呼寄せて、私を風呂場とすることは
有るまいかと、そん事を[illegible]

□それとんでも取るを[illegible]
がゝ。

□式方の前身は半分暗黒界に居らッしゃ
れのですぬえ。保し、あの時代の藝妓[illegible]と今の藝妓
員とは、系統は同じで、組織も素質も素
ひそ品性も非常に向上してゐられます。然
してゐ際場線とは是非無て世界なられば
成るべく程に進てゐますので、毒蛇の如
くて仇人の蟠りを[illegible]と
説明した。

□猫吉は謙遜して
□毒蛇が向上したのでは有りません 紳士方

が皆様に覚醒をあたつたのです。従つて相手を鈴子嘉幸でが、悪い生活に陥る事ができなかつたのです。

□嬉しい事は成つたのです。

一行

サゴチ

三回

明治氣分を濃厚に——新世紀の防馬——
志——勇み上手——多徳を質問——獨見
嘉幸——従つて実行者——敵妻の響きま
謹慎の縦びがゆめて——大告白——

一行

□今日は、近頃飾り食卓を上手に拵へる生
りまして、先生の古い思想を喚起さうと企
てました。どうぞ先生も上つて頂きたいの

で御在ます」と武田氏は云つた。

□そんな禁酒会の仕方が多いのですが、先生が
ひとは結構葡萄酒は差上げる事を御つ
て居ります。お正七年位入れたのがさうでなくて、
可成り葡萄酒を熟みて居ります」と婦人が云
つた。

□いや、出鱈目、葡萄酒を結構ですが、飲うと
皆様の御顔を拝する事が出来ないのでして、
大いに明治氣分を議はしてください」と武田は答へた。

□どんな皆様方が来られると思ひますと、先づ[redacted]

□お蕎麦屋さんの焼甘藷が出ません。

□やア、これは珍らしい。と公羽は喜んだ。

□焼甘藷は高価なる珍らしい物花です

めと帰り車お喜び。

□今は何処を探しても焼甘藷を見ません。[redacted]

探し当てました。と武

内女史は説明した。

□そのうち、いよ〳〵食堂に入ると、西洋四コ、

天ぷら、接鮨、鰻の蒲焼[redacted]

取寄せて

ある。

□皆様紀元二千六百年

名ばかり聞いて、書物を嗅いだ人も無くてせうと

女史は言つた。

□それから、蕎麦もしません。

□翁は[redacted]の葉〳〵い食物である。ゆんど

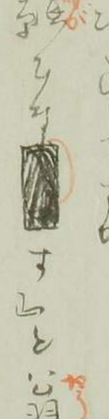
これで甘藷酒は悪酒、悪酒、正宗とすりたい

処だと思つて、然うは行かない。

□で、帰り車が部を勧め上手なので、甘藷酒

あがらない酔つた。

□ えゝ、言葉を問を発しては書婦人編君に
向て其の名称を称して居りますと
けれども、今後の問題の

ごとき墨書で有ります
と、
之人社の様の菊井宇屋のお勧め振の問上今
ふ為る、私は其の酸酢を
然る私の口を開くと、皆様の前に其の名称を
質問を発せ求める様な事でするから、どうか
御了承願ひます。

すと富羽は
述べ立てた。
□ 皆様今日の御調査で、どんな質問がせらるゝか
皆様に承知して

考へて、輕き不安の色を輝きました。
□ 他にも有りませんか。皆様は私が此年時代
の老年に入りますまで、いや隠居する
当時まで、一の主義を擁して頑米は、イヤ先禮
沢華国は其主義の為る所春閣を吟花すれ
それは獨身主義で有ると記憶して居ります
す
□ 出来ません。と諸方の其声
□ 今日では多数獨身主義で居るから、そうか
知れませんが。これが為けりやいゝのです。

「悪く此席の方は獨身論者で、兼て実行者で有りますの一番しれ主義の下に、此金組紙が幾金の……」

「今日まで獨身を續けて来て居ますと云ふ事は、嘉幸の安助の誘ひと云ふて居ますれば」

「と武内さまが一回よ代って答へた。

「いや、それは如何に耐えられん。私は此ぶだ獨身論者では有りません。イヤ婦人の獨身主義ではだいぶ反対致すのですが、一つの主義を何処までも貫徹さるる位の意志の強烈さのあるのは、如何に嘉幸を掛はずのは

るのでありませんか」と弱は何処までも若い者振つれて呼びおせ辭をいつた。

「ですが……」と武内さまは笑みて、羞恥の眼を四辺に配りながら。

「ですが……今夕は嶋浦さんが思切て問を発しまして、つれて私に嘉幸を思切て一つ告白致せい事が出来ますのです。今夕の宴会から得れ歓喜の響きと、諧調の緩びが伸れたのと出容調をもらうのです」

「拍手はそれを歓迎致します。」

皆様、既うお豆ひなれたの声を聞く花盛で
有ります。今更御行の表面のみを飾りて真の年齢
でもあるまいと存じます。内面[redacted]の真の意を開いて
互に語り合ふ時期も来たるものと存じます。
ドキッ。（拍手）
さては（拍手）あは今日ここは学生の身論者でし[redacted]
これから後は[redacted]身宣行者[redacted]論は別です。実
行は実行です。毒の生活は誠に有ります。毒が
苦い時分に猛烈身論を唱へますのは、猛烈身を
真理と認めたのでは無かつたのです。四大同盟

とか、婦人参政とか、そんな運動は動もすれば、他に大
いなる原因が有つたのでは仕ません。それを今多
告白致します。（謹聴）それは……それは……
□[illegible]で綽じ来つて女史の語は言葉がつ[illegible]。
□テレ隠しの洋装の[illegible]がプ[illegible]

四

□何人氏の婦人形観を成て書きたと、人とは顔
を見合せざるはなかつた。

―冷静な頭脳―重行を下して―同じく―又同じく―恐縮の連発
―倫敦結婚式―地下室の地上―光栄
―高熱を感じて―不覚極まる回顧―

□武内女史は思ひつれとくふ態度で。

「妾は世間を偽つてゐれとはゆ〳〵そぶん。自分で自分自身を偽つてゐるのかと存じます。強て妾は主義の下に隠れてゐるのを寸頃では覚て居ります。妾は、妾は、今日迄の結果、獨身論者の群に入り、又芳子様と云つて今日迄来たのでありますと云つて又水を呑んだ。

「失恋？」といふ声が低く密語れた。

「その失恋の悲傷に陥りましたのは、今日の正賓たる嶋田氏が乙子人と華燭

の典を挙げさつれ時分で所在ますと云つて翁の方をそゝて微笑を洩らした。

□翁は甚だ恐縮の体だ。

「併し今日では、斯うして[redacted]のこゝで、又皆様の前で、斯うして平気でお話の出来ることは冷静の頭脳に成りました。唯甚だ今は恋する女性は唯白で有ります。それの他は所在ません。以上が妾の武内女史は云終て、非常に腰を掛けた。

「ドッカと腰を下した。

□一同は皆拍手します。

□翁は笑と涙とを手にして立上つて。

□御内儀史の健康を祝します

□皆それを受けて水盃を挙げて乾盃の形をします。

□[redacted]氏を入れて鳴物賑やかに！と叫んで立上つたのは、△△女学校の校長、某女史である。

□今日は誠に嬉しい事は非常に光栄で有ります。第一先光栄をして一層光輝ある結ぶのは、唯今氏の告白で居ります。

此機会を捉へて立派な告白をさして頂く事が出来ます。これ以上の光栄を感ずる。

□諸聴衆と人々が叫んだ。

□御内儀と同様に縁あり、武内先生と同様に縁深き、京内の通り身体虚弱で居ります。加へたが主義は後の方で有ります。事実然るに他に無い様に思はれるのが先で有ります。それは、アノ、多数の多恋のもので……その痛苦を與へた方は、同じく此席に居ります。

水

□ 手が極まる得するか得さるか、次の○○婦人人事を頭某女史が立上って。

曰 妻子を去白をさして頂きたく。先張そのは同じ意味を同じ言葉で表はすより他ては有りません

□ 山の某女優が立上って。

曰 妻子……

□ こゝは表情で有った。

□ 陸軍画家、俗宗教、嘉俗家、代りに立って同じ意味を演説った。

婦人記者、

□ 翁は此の頃の東京発の頭が上るのツエッペリン既行船が偏致製作当時のごとく、地下室で地上に立ち上った。

□ 最後の猶吉すやが立って。

曰 まゝ言葉で申しまする。其時の言葉で申しますると、同じて御覧なんですの。

□ 翁は既に紙幅が仕切れふく時間て立上って。

曰 先輩と先輩が爭ふて非常に高熱で、汗顔に耐えんで……と云ったん。

水

□皆ノスル笑ひ声。

「人間の新らしい平氣で先づ問題が、芝原先生と被告と相談して、謹慎の間を解決せらるる様に成れば、先づ幸福です」

□第二笑声がかけた。

「第二は、あれ丁度の今日まで、私達不艶極ふ者は無いと思つて居りましたのですが、豈図らんや、非常な艶極家で有りまして、嬢ふ次第で……併し、最早今日では、昨日の昔話、十日の菓で……や、諸氏が私如き者と結婚ふさうふか

つて事のそれが、却つて幸福で有つた事を祝して、改めて諸氏の健康を祝します」と云つて洋盃を挙げた。

□有名な雄辯家の話は実に面白い話で難い。

4ゴチ

昌昌

6

一行

しれ陽坊の上一面の素晴き景色の歩行者一自分の似過ぎた人一鳥角の化れた目鼻が何ふ云へ何者かの何ふ云へ一いや何ふ云ふ方法でもなかなかの何ふ云へ一顔の人種所有の印一固たる奴一

一行

□葡萄酒ちがう四方八方から。

「この酒は、羽は古い酒つたの三十年目の酒である。

□自動車で送られるのを暫く断って運動
者を殺ぐ為めで歩行機で歩く事である。
□外は朧夜の月で、何とも云へぬ好い心持。如何
時でも歩行機で行くのは無風流だと機を
脱して引抜いて、チリ〳〵歩きである。
□空ゆくは日星が隠ぶ様な無粋の空[illegible]航の
燈火が見える。時ては月を遮ぎる村雲の如く
飛行機が踏がる事がある。
□それを反して下の道路は減多に人が通らない。
い時を貸切自動車が通過する位である。

□九階坂の上まで来て、其所から神田方面を
見降しながら、過去の面影を何処にか求めんとて
立留ってみると、珍らしく一人の歩行者がある。
□然らば、その音信を歩行者が可惜しい。
話し合って見ようと思って、此方から行くと、彼
方からも歩み寄った。
□朧月の光の処は、電燈が強く輝いてあるので
能く見える。
□驚くのは歩行者だ。
自分が向ふから歩いて来たのだ。汝は前の

旧形の嶋田太郎が合る。

□白髪、白髭、長い鬘、曲る腰。

□彼の洗革でもない洗革の俳優かと疑はれる程能く似てある。

□或は全くそれが本統の嶋田太郎で、私の方が偽物ではなくいかとさへ、錯りそれが似過ぎて

□向ふ、それが語り掛けて。

□しけ色は如何です。今の人間は風流心が無いのは残念ですよ。と口を切れ。

□声までは似てゐない。

□然るですね。私もあんな若い者ですから、風流心の無い方ですが……と翁は白髭を撫れ。

□貴郎位の年配では、何んする知りそうなものだが、私達の若い時は、山駅の坂の上りには提燈を心ともし燈台が有りて、それを皆人が珍がつれんでもれ。坂の路といふ位です。石階が怪度のもッ有りてもアの田舎の下を電車が通る様に成れ

[redacted]

のは、それがずいと後の事です山と得意になつて話り出しました
（が、今では甘霊車も通らなく成りました）
◻ それは却々面白いですな。先継ぎながら
貴翁は餘程の御高齢でせうな[illegible]山
◻ 九十一に成りますよ山
◻ 九十一の？山
◻ 三十年振で帰つて来ました山
◻ えッ三十年振で？山
◻ 其間無人島生活をしてゐましたよ山
◻ それでは貴翁は？山

◻ 嶋浦太郎です山
◻ へえ――貴翁が嶋浦太郎？山
◻ 餘り歓迎されますまいが、航空機が試みられない……既に飛行機や飛行船、或は空行機で市中見物も面白く無いで、斯うして私は昔通の空行をして居ります。然るに貴郎はお若いのに空行とは感心ですな山
□ 公翁は何んと考へてゐらるか、全く解らなく成つた。
□ 何んの為に我嶋浦に化けて、此辺をうろうろしてゐるか。其目的が解らない。

1.60
水

□又何者が妙なる化んでゐるか。それが分らない。

□化けるまでに巧みに化けて、化けられた者人が離魂病であるかと疑ふ程とは、何の為方法で然らん成つたのか。それが分らない。

□大正三年六月は、人間の結構が出来る。これで日露戦争の人權所有の印ず捺して歩かれぬ。

考へられる。

□や、貴翁が有名な俳人碧梧桐氏ですか。

そのもと然らんとお話の出来るは寄る年

栄です。如何ですか。私の宅は豚汚穢ですが、えゝ

粗茶で敵ひたいと思ひますので、出立寄

を願ふ事はしませんか。

□それは難有い。然らば心からの歓迎する私は

喜びます。

□固そこの岐で別れて参ります。

□歩きながら俳の俳翁と蕉の俳翁とは種を

俳の俳翁―ロビンソー漂流記―雨の雨殿―
途中で行かれた人―裏面を―名誉詩歌師
―一種の興味―東洋のナポレオン―和
蘭ルーズベルト―無邪気な芸術―

語り合つた。

□僕は興ざめを覚えて、無人島生活の様な話のあと、ロビンソンクルソー漂流記を横倒しで語りつゞけた。

□やがて船頭が来た。

□えゝ、此所が今私の仮家なんです。

三浦野の門前を通る。

□えッ此所へ？此所は三浦中助氏の家

船でせう。と僕は弱はキヨトン。

□然うです。私は其所を合る船頭さんの

息子の次郎ですよ。と公羽は猶且つ喋れた。

□いッぱと三つ程僕は、其僕雪を面白い

□腹を抱へて笑ひ乍ら、公羽は三浦野の傍来

した。

□せるへん 負ふ老夫人と負ふる若夫人とは

吃驚して、

□如何ちさつれうで 此花手山

□金沢で 行が寄つれ寄つて 此花手れが山

□翁は其との次第と僕の事を物語つた。

□あゝ、既う世事つれが山と負ふ夫人は

云って格別驚かぬ。

□妻も始めとそれが出来ることは考へて居りましたが……山と陸る若き人の豫期と違ひまして

□何者が何の目的を、何のための方法で私の偽造を試みたのでせう。私は麗張のまゝ

□然うで御座ます。時道現です。唯今その説明を致します。陸ふさん貴女は崎原先生の偽造の告白書を小説早く

政治

へ告訴して置いた方が早くでせう。と言ふ

は云つた。

□悔ゐは心得て電話を掛けよ云つた。

□電話室へ先づ弟は入て、貴子さんが何

ある説明をして呉れるか、それを待機へた。

□其所へ中助が入来つた。

□やア お客さんで御在ます。此頃あん

お者が時々出て来ます。それは偽脳の

一部分異状を生じ者が書いたりするので、所謂

旧態再発です。それで何か他の犯罪を企てる

といふ譯で日無くなりますが、事務の全く絶えれ今日では、昔ちゃんば古式が現はれる位ょう古騒ぎをして、それを門柄へ強制法令を出ます。それは皆山祝宮の祭日ですが、他人を雇ひて宴会をしますで、然るに犯人は著目して宴会をしますので、遣きは今のそうです。まあ先生、命令を彼者は無いつれのそばが、昔の感じで行くと、今後それをもが丸時坂でせ強盗、追剥ょうお事もあさつれ後の、可哀り意大事件です。

何んの事だか事件ですもちゃんね。

今申しそれ通り、精神異状者です。

けれども、そんちゃんは現在では、早や根絶してあるる位なで。

それが時を再発しそうなら、山祝宮が道い

て有りそうすので。好ゐ先生も表面ばかり明覚

まさるもあいで、縄でもも明祝宮下さいと

しれのです。

事が能く分ちゃんね。

今日では相当の罪を有て居りそうすが、

強盗とか、掏摸とか、或は詐欺師とか、然るる

種類が無く成りましたのは、勢ひ所謂
詐欺師であります。そんな事をして他人の
財産を奪ふ必用が無いのを少花ますが、其
所ら成ると、人の名誉が尊重されますので、その
名誉を強奪せんとして、或は詐欺者となる者
が多くなるのです。つまり今夜先生のお話ひ
ふさつたのは、名誉詐欺師の一人です。

問　益々面白くなつ
問　なるほど解りました無不動産
　　一種の英雄崇
　　拝熱です。

問　まだ分らん！
問　先生が三十年振で帰朝なさつて諸方
で歓迎されて居ると云ふ事は、よく聞きます。
世間で先生を成りたれく思ふのです。それで
る成つて見たく思ふのです。それで彼の活動
写真で世間の人体焼附の真を行ひ、
世人を悪く変化して点ちも先生を成りたく
し、公衆が尊敬するそれ
て喜ぶ。つまり名誉詐欺を行ふのであり
ます。

曰、小しは分てあんしたア」

曰、この思想は伴し昔のような社会でも
は有りませんか。秀吉を氣取ったり、家康を真
似たり、或は東洋のナポレオンをいって仕ったり、
西郷ぢゃ各地の西郎が出たり、昔ばっきり
でしてはもう知製のルーズベルトすでせまあれで
は有りませんか。それです。昔は内面的な英雄を
氣取ったのですが、現在では外面の[redacted]
偶然を
て満足して居りますと」
曰、然らば。それもよろしく昔ばっきり氣を
お茶番で、

何のそんなに表せたとしたくいとも思いでは無いか。
彼、本物の時代を話し掛けて面白くて出ぬ
んて、寧ろ滑稽でいい」
曰、白鯨、昔ふる笑って陽ろ。海落として人を
魅めるんが、今日では確かる精神異状者と認めま
す。先生、夢が種をもい事が出ぬ。ふ
が興味を持て玩ぶ代の裏面を研究なさいま
曰、見るよ、古いるんですよ」

4ゴム

三島

6 1丈市面積の敬意―恐ろく夜の海で有つた―
れび百四五十歳まで生きるとすれば―家屋を造
外国の例―立斬が問題ぢ―九十一才十七を知ると―

□それから羽は寝室に入って、暫くは無茶苦茶に怪せられる事もなく、ベッドの上に身を横へたが、今夜は如何に眠られない。

□然るに又種々の事を考へやうとすると、今夜のは先夜のと違って、少しも悲歎に傾かぬ。

□前の時には、胸の中で、秋の雨が凍てる様に感じられが、今は心の奥に、春の花が咲き初めた様に覚えられて、何となく云へぬ楽しさに温まるのが、始に混合して発生する。

□何んとなく今夜の寝台は白かった。婦人ばかり寝室に入れるので有ったが、それが寒く自分に思はれる人で有ったとは、不思議な事だ。

□けれども、いづれにしても、あの千歳の後の年齢に達する時代に、見えて居るとしても、無事な世界に、獣身を化せられた佐助が、その内面相の如何なる変化を表するか。想像さへ餘りある。

□あれで方数一時間食つてゐる者があればけで
あの先さんれのであるから。若し一人そそと語るの
であつたら、夫は結婚を申込れれかり知れぬ。
□考へて見れば恐ろしく、夜の宴であつれ
と、今迄の翁は性急を感じて
□でが、断らして自分も義理で来れ。
□まだ百四五十歳で生きるとすれば何時を
ぶり当家の世話する
又無理を押して居られない。
よ出せん。

□他よ一家を持つとすれば、自分一人でも四角
まる不自由な譯で、世間は当家を送
らまるは居られない様な氣がせめても無い。
□それでは……。
□武内女史では直平である。
□猫吉は此先当家りそい。
□あの婦人食頭？いやな事が。
□あの女学校長？感心しないね。
□女優、新目。閑秀画家俗家勤俗家問題
婦人記者

□もし、出来得るならば……。

□……花の盛りは何歳であるか？

□問うるく十六？　十七？

□然はれば十一歳？

□れば十一より十七を引きたるとき、それは七才。

□いや〳〵、然る事実なるから、イケまいので、れば十一より、少くも五才を引きたる後の四十一歳の自分の歳とし、それから十七歳を引いて見ると、二十四……。

□二十四位の婦人の年齢の差は、そんなに驚く程

の事では無い様に思ふ。

□昔の昔のお半長右衛門といふ例があるが、それは閑の前の事で、幼の例を能く知らないつれ頃の問題である。

□古正初年頃、能く幼の名士の結婚ことが新聞に出てゐるが、七十近くの人で二十位の人と結婚したが、世人は婦人の婦人に対する無くつれ。

□日本でも漸々に元優が、改革の世の中で若い婦の基と結婚した、人はその六の時の変ふのを当然の事として、創建

のお蔭で若くのし十歳ばかりで逝去りしも
ある私が、花嫁と結婚しれのりして、酌て不
都合な譯ではないが……花嫁が承知す
るぬか。

□世間が問題が。

□向ふの心を試めすのは、如何して古法を
取ってゐるが。

□若い時は恋する、同女の愛を
引いれのは、どんな事を私はしたらよ。それから
て一ッ考へなければ成らないが、何

んなもの。七十年前の事がわかり、却て去年
がと思ふを繰るとなる一通りで無い。

□到頭一夜眠らずに明かした。

昌品

一睡もなし——飯喰ぎ——恋の病——
一日六版の新聞——アイスクリーム——財産
芝坪は義庵食べれか——どんな地獄が——
国立病院へ——志願のもりで——

□明くる朝、三浦一家の人は餓りる羽が芝せ
でぬので心配なった。病室では無いかと思つてゐ
る。

□なぜ世間びと。昨夜一睡もなかつたからで
暁方よ成つてから、軟く眠りよ成いのである。

□眼の覚めるのが十時。
□起きて顔洗ひが悪く。
□出所へ、魚る丸へが入来れ。
□先生、何処のお悪いのでは病院ですか
□いや、何人も有りません。少し昨夜飲
過ぎたので……
□そうなら花柳の癖の事を考へてゐること
云ひなさい。
□こんなら早くいでなさい。さうや病気では

無くいかと存じます。心配致しました。お飲過
ぎでしたら早速……
□又祝宴を呼ぶのですか
□いゝえ、然るでは病院ません。お飲過ぎ位
の程度なら、つまり胃が不調なお助りので
すから、昔から能く効能の有ります ホシ[illegible]
胃腸薬をお用なる所が宜しくいでます
□あゝ、あの薬は確かよいでせう。早速用
ゐなさい。
□胃は快く成ると、恋の病は却て治らない。
息ち

水

□下宿屋は旧態再発で、脳の一部を紛点を[illegible]、精神異状者と取扱ってゐるのだ。自分では歩いてゐる。

□世間へ中助が入来った。

曰、名誉詐欺師が捕まりました。

曰、昨夜の詐欺師は？　あの私を化けれさせて、今新聞が来ました。

曰、えッ　昨夜の詐欺師？　あの私を化けれたのが……

曰、今朝　午前三時頃捕まりました。

曰、今朝の三時？　それが能く今朝の新聞に出て

れたのだあア

曰、新聞は？　一日遅れ■六回づゝ発行しますから、今出ましたのは第二回版で、午前十時の発行です。

曰、へゝ事だあア

曰、世間で名誉詐欺師を調べて見ますと、何ンでも事を仕ふくらす好い男ふので、妹達は無論有ります。粉百萬円貯へて居る男ださうですが、事が重て人の尊敬される事が無いから、つゝ先を化けて見たりするのです。無

縁迫財の心用が有りますので、早速(例)立病院へ入れられたことです。

○何者かの為身は……。

○高利貸で有ったことです。

○嗚呼、高利貸では人が善く謹が。

○此頃では高利ちゃんで借りる者は殆ど無く成てしまひました。

○玄関ちゃんかいどの位多くの人が知れ合ひんで、幾度財産差押へをされたか、数へ切れない程です。

○然るで此方れもアイスの一人が知れない。どんな地顔が見てやりたい位だ。

○それは女男は私を苦しめ

○それは一ツ所参考の為、国立病院を参観に入るいってはどうですか。その名誉診断師の治療を為る処を所見する為の一興ですから……。

○それは面白いでしょう……。

○此気持が悪くなるのでしょう……。

○何分気持が悪くなるのです。国立病院で一ツ

検査してお貰ひする方が宜く。

□いや、まあ、それ程でも無くのこと……

公羽は氣が聞いて出する氣の利くこと。

□それもの、と病院へ行って御頭をみて、これは戀の病ですんと当てられた場合は、赤面のもの。

△一行

4ゴケ

三七

6

□世間へ花枝の嬢が入来れり。

□あの阿母様、阿母様、数歩

帰りを見物——不良青年減七——ゾクゾクして——肖像写照——空中は乞物で騒集——

公羽と花枝嬢との同乗飛行——胸ドキドキ——

△一行

行きたいと

なるでありますが、如何でございましょう。と両親に許すを請うた。

□数歩？と公羽は聞かめた。

□運動は自分で飛行機を操縦しますので、数歩

とも云へませんが、此頃では数歩とも申します。と

中助は説明した。

□負ける方人は花枝嬢さんとて。

□一人ですか。と問掛けた。

□はい、一人です。

□それで何処へ行きます。

□東京湾上を一周しますか。それとも富士

の裾野迄まで行って参りますか。此は伊豆の大

水

橋まで行って見ようかと考へて居りました。

□翁は驚くて。

「嬢さん一人で散歩ではいけない、散歩するなら、そんな遠くまで行くのをやめなさいと心配さうに問うた。

「そのお嬢さんは、飛行機をやるから、

「お力さへ出せば、松島見物でも、橋立でも、幾

鳥でも、日帰りが出来る位で時花子さんは、

良子夫人は答へた。

「でも一人で会議をさせるとは、事件何

かなる」

「苔の陰に不良青年が居りさうな、電

車の乗車券を買ふ学生の名義を表記するのが

好いとか悪いとか、そんな心配をする時代とは

違って、大お方で時花子

「成程さう

「なのです、先生と一緒に散歩あそばせ

ばっ、と花枝嬢が誘つた。

□翁は「ゾッ」と驚いて。

「それは是非連れて行って貰ひたいな」

□中助夫婦は顔を見合せて。

「でも先生、おしゃべり師氣分が[illegible]勝ちいと化有
いきんが……」
「むく然ッぐッれ……だから、その故郷でもし
わるく悪く時るとと思ふてふアと
「では入るッぞ……」
着けてぬ。
「妻、先生と市一結ぶ行[illegible]と、擦違ふ跛行
撫かる敬意を表されたから妻までが鼻が高
う歩行すわと花村繁も喜んだ。
「でも、既よ羨墨つれても、私とは人が氣が著く

と翁は打消した。
「いえ、若くお助りちさつれ事ん、既う今朝の新
聞を市肖像が出てを居り事。名誉地位の
肖像と封然して……既う半日降りつれる、又
変相を畫直さるな時
ぬ処ぐッれと、訳地師が
注かされて居りすと
「お若くお助りちさつれんとの尊顔を拝
しやると、又、空中はロ兄地で騒集する事でさると
負るおくんは云除えん。
「それも困るから若い花村さん、成るべく 腹行機面り

小

の無い方へ行って下さい。

「では坊ちゃん。甲州方面から富士山上を飛行して、三保の松原迄から興津迄を通って、帰りは箱根を越して帰って来て下さい。」

「伝言宜しく願みます。」

□翁は直ぐ飛行機に乗り込んだ。

しばらくして来ました。

4ゴム 6

昌吉

一無邪気と有邪気 一紙屑は空を飛 一古尉ブラ下り

一玉川の水は自然の掛川 一山猫屋の

一新婚旅行 一理想の美人は

一恋の年齢は無い 一曾祖父が曾孫を愛する様子

□無邪気な花枝嬢と、有邪気な馬公羽と

同乗飛行が開始されました。

「花枝さん、一つお願みがある。」

「何んで御座いますの。」

「饒舌過ぎる路で有るから、紙屑の上を飛んで見て下さる。」

「それは何んでございますの。」

「紙屑ちゃんが、紙屑ぢゃ唯今は伝んでいるから御座ですよ。」

「今は無い。」

「彼処は吾国の航空界を忘れる事の出来ぬ霊地であるからだ。どう

佐陸軍で彼所に航空の為に力を盡したが
知れないのだが……
左様でございます。飛行機は昔は部を
注意されれ土地を出ます
今では何か記念塔か何か建てるそうです
のだが……
既に練習する。必用が出来ませんので、航空隊
何も出来ません。記念として何か急く集で
ブラ下りの球といふ事柳が
今遺憾として保存なされてあるそうです

日蓮上人昭和紀念の松とか、八幡宮の社とかいふのもの、
古跡としても面白いが、鎌倉の森とかいふのもの、
飛行機練習所で、大尉ブラ下りの記念碑

小金井の櫻
話に聞くよりも、大きさを驚いて下さい
櫻は早くのので、此頃では
甲州街道を参り
まだ咲いてゆきません。
あれが上野の
櫻のトンネルは
有名の三所明神の森がある。
櫻
先生
飲んでみるのも
とても足りません
唯今では水道を利根
川の水源から引いて居ます

□ あッ、左門……日野……昔、甲州街道を旅行
きゃらは、ガラクタ馬車に乗つかれて、日野の原で
は女馬車を捨てられ、山賊□が出没し、これ多くが、今
日では、えんぎ者が無いもア。やッ、気車が出来てから
非常に便利になつて、田舎人がそんなのは、既に
夢で、今では新橋を駅として空中が行ける。
やアしまる……大きな布を被つて、
□懐古の時の下に蔵れて、つひ恵の方は忘れて
るが、ふ佛峠を越えては、空中の往来を稼ぎ
ながら、接上る花村と姫二人まで、弱は既に眼下

の景色）ちんか入つてふく成つた。
□ ゆえ花村さん、跡からよ風る世の中が変つ
て来ては、旅行の仕方が全く一変して、日本内地
[redacted]ちんか旅行の内は、新橋ふく住でせうふ
ア□ と下らない事から語りぜん。
□ えゝ、あの□へ行くのでは、今では鐵が門前な
ぜんのですから……と花村嬢は伺へふく差へれ。
□ すると……旅行……新婚旅行は、手頃旅行
撰る無のと、ちゃ帰姫二人で出掛けるですか。
□ おほゝゝゝ、新婚旅行ですか……
□ 然うです。

甲　然う する方も有る様ですね

乙　花嫁さんも、今は、流行樣で、新婚旅行をするのでせう

甲　如何でせうか……

乙　いや、他人の事を云ふは無い。貴嬢の事ですよ

甲　でも、それは、今から、分りませんわ

乙　けれども、既に花嫁さんは、意中の人が有るんでせう

甲　さあ、あの者は、有りませんわ

乙　無くいとしても、併し、どんな良人を持ちたいと云ふ

乙　そして、大概、貴嬢の理想が有るでせうが

甲　理想ですか、そんなものは、イカン。私は何も無

乙　やはり、それは、イカン。私は何も無

甲　打明けて話さなければ、イケない

乙　でも、まあ、そんな事を考へる程の年齢

甲　は、まだ、まだ、年齢は無い……いや、理

乙　年齢も、無くてもよいのですから、参

甲　想の良人が、まあ、

乙　考の為る、私は、話して、上げるが、どんな良人

甲　を持つのが、一生の幸福を有るといふか、年齢

あんかを問題にしてはイケない。四十の差があるとか、五十の差があるとか、六十、七十の差があるとか、其人たるべきんが世界的の紳士で有つて、多数の人から尊敬を拂はれて、然るに又婦人に対して絶くまで親切で有つて、親がみをお愛がると同様に、組合が孫をお愛がると同様に、妻を愛する人でなければ似合はないと思ふ。ためる……

○先生、そんなら此方へお寄りあさくまうと、

○飛行機から落ちますわ

○あッ

○大月を過しまして、これから吉田の方へ

○りまする。院う富士は直きです

4ゴム
言葉

6
時代――「富士の秀峯――絶氣流――結婚の奉仕
――一夫多妻――側面結婚――結婚設書
――花嫁花婿の踏奉運動――れ十一と十七と
は――南場一致の香決――剱ケ山等へ――

○前面に山岳然として従見つ富士の秀峯単に山としてのみ見るを許さない。神靈の偶の

○清浄と神しいくする程の壮厳を感ずる場

人で、婚姻は、それ程でも無い。花枝嬢
は結婚を申込むキッカケを捕へんとして苦
心である。

曰、や、どうも若い人は結婚を恥かしがる
からイケない。古い川柳、母親が娘に縁
談を語って、其諾否を問う処を、斯う詠ん
である。問はれて返辭の無いが返辭
りでぬ。昔は娘氣質としるが有って、顔を
赤くして、下を向いて畳への之字を指
で書いてある。そんな姿は内輪の娘が多か

つたのだが、古正三十六年、銀行機で勤務
する盛士の少越をする時代である。少
し貴嬢達が多くなる事は無い。思切って研究し
且つ論じ方が悪いでずよ」と翁は詭き立て
た。

曰、先生、これは毒ひすぎる」と花枝嬢、初めて
口を切った。

曰、えい、何が毒ふ？」

曰、結婚問題は、個人々々と約束するもんで、
そんな事は無く成ってそろそろ考へる」

「だと、親と親とが許嫁とくらい婚姻ここ」

「そんな事は[illegible]無くなりました」

「だと、どんな事も[illegible]つれのもの」

「一時結婚は減少そそる減りそうれの」

「えッ職業そそる」

「日本だけは、その要影響を[redacted]なし、結婚は保たれましたが。世界大戦争の結果そそ、どの国も男子が非常に減少しそ[illegible]る男子が非常に減少しそ[illegible]結婚が減少そそ減少そ、

一夫多妻が公認さんそうり、側面結婚とかこの[illegible]が許可さんそうり、それは既にお話の通りこの事ばかり有りません。幸ふる日本は、そんな事は[illegible]そんなこと[illegible]が、大正初年頃流行しそれ自由結婚の弊害を皆認めそれので、個人と個人との結婚は禁止されました

「すると矢張大昔よ[illegible]」

「[redacted]」

「依ふる[illegible]よ無いでせう」

「あく、そんな旧式の用ふるれそんん」

「どと如何するのです」

○結婚媒介業を開いて、議員が拵める撞る撞て

○ねえさん

○村長とか町長とかで拵めまして、又其上る郡長とか市長とか縣長とか、そんなに通過して上る、第四

○結婚媒介業へ持ちて、それから寄めるんですを

○どうも大変手数がかかる

○ずゝ現代では、どんな複雑なものでも

○様な、そのゝ機関が出来ますとも……

○然するとも隨分、花嫁花婿の選擇は難しい

○然るに■■■■■■■■■■■■■■

○私十一歳の時分に、十七歳の花嫁を娶る

べく結婚媒介へ請願して、■■■■■■■■■■■■

れるは分りかつてする。翁は悲觀せずはなる

るれたく。

○嗚呼、此目的を達する事が出来い位なら、

一度の事、ちんでる方がいかに幾倍。

間の喧嘩へ行のか。日光の華嚴瀑へ行の

か。

○いやゝ嫌らして今度の少も越さることを

幸ひ、脱行機から、立絶頂へ脱下りて、剱ケ峯へ落ちて死ぬのも奇縁とくるもの。

□併し、一人で死ぬのも詰らぬ。紅村鑛と共に脱降りて、富士山頂、脱行機脱下りの無理心中とくる。新記録を造るも面白い。

□然るに、法心坊は公明正心で叫んだ。

4ゴム4

6

号外

①

□九千一歳の老翁と、十七歳の人造鑛とが、富士の山

一行

温泉を東京へ——海水浴列車——

大雲丹を土産——痴人の愚挙——善玉と悪玉との

——悪心のメートル——

——世界中へ

——富士山頂へ落ちて無理心中——

室

の頂上へ脱降りて無理心中を遂げんとすれば、正に空前絶後の大珍事で世界中へ號外を出して騒ぐ事件である。

□遠大併し愚劣な考へを嗤ふ者は馬鹿太郎とゴケれる古稀事業の晩年に男子生べる譯は無いのだけれど、葉の如く脆く、思慮分別が待ちきれぬ結果なので、是非も無い次第である。

□神州無二の霊地に、一人の痴人の愚挙の為に、濃され終るかと思ふと、情け無い限りである。

□そんな考へが公羽の脳の一部分まで来た。

□自分で自分を批判してあるのが。

□確かに脳の異状をまで来てゐるのがもう。一人の心が二分割る位離れたのが、捨て置けば強い方に傾く。善悪と悪あくとの葛藤が。

□これは困った事だと考へさせんが。

□先生、古賀さんが成さつたのでは有りませんか。病気位でお悪くの為に、著陸した巡視官を呼びませう」と花枝嬢は心配した。

□巡視官は見られた古賀が。

□いや、神様でもしたら長距離を無理なんので、顔色でも悪くのがもう。さア既う大丈夫、気を取直して……歩ける山は越さ

いのぬ

□あゝ先生、今越したばかりですわ

□えッ

□それ既う海が見えますわ

□おゝ

□これから三保の松原の方へ参る処ですわ

「あゝ失敗つた！」

□時機を失して了つた。

「富士見！　引返せ！　引返せ！」

とて来て見れば、今日はこれで帰りなさい」と花村の嬢は云つて振を取り、箱根山を目標として飛行を続けた。

□富士とふ大舞台を去つては、飛行を終ふ振ふ事多し。又、肥心の方がメートルを揚げれので既う無理ひ中の心の薄弱て事れ。

「嗚呼、西日かつた。実に惜快でした。既う帰て

8 貰へ」と云羽は何食はぬ顔で云つた。

□武四は、東海道航空路を進むとて、最大急航電信が何隠すと云く往復をする。

其他、特別電信機が少あるを駆行してゐる。

□旧鉄道線路は、貨物運搬の電車が通る。

「先生は今度、箱根か、学舞か、古城山あたりへ猟に行くつもりでせう」

○何の奇なる方法でゝ新案されたのか

○島は鹿行機で直ちに電線を張りて取りますが、猛や麻は然る多く参りますから、電気仕掛で強く綱を陰へ強く引いて、圓く上で巻きます

○それでは一向興味が無いなア

○先生、院ら箱根へ参りました

○相変らず混雑する混雑は鉱泉の噴湯する原の底まで極下

○近頃では混雑の噴湯する原の底まで極下

○大噴湯をさ〳〵と鉱管で東京

まで引いて有りますが、

○でも方法

○昔の通り多いでせう

○箱根は

○書る人は

○やア小田原……

○存じ……

○直きに大

○磯が海水浴は相変らず繁昌さ

○頃の海水浴は方法が昔から見ると違ひ

ますさうです

○どう違ひますか

○大磯で例を取りますと、大磯から島帽子岩、

それから江の島まで海中軌道が敷設されまして、

それを海水浴列車が発せられます。それから無

なぜと、海中を列車が走りますので、死は深く或は浅く海岸の間を実行する。廣い自然の気車海岸地方が生命をすてる……」

「豪い事をやるですナア」

「この時の鎌倉へも海中列車が発します」

「頼朝がせきてるうちに行んとくふびるる」

「言へば話でもする間に早や東京に成れる。」

「おやゝ宅の近所が火事の様で御在ます」

「火事？」

「それは大変だ！」

「直ぐ消えますめ」

「一行」

「一行」

「歌行燈の情陽——差荒を宅に中で掘てる可なお——心の奥の火は——浮気の毒——外国女優の写真と手紙——ヤキモチ——それでは四字書——子供と俳人とばかり——」

「市の女房所帯は、旧式の上に、物が少ないので、消防機関は甚だ不完全であります。それ故に大正入てから大火は少くなかつたが、今ではどんな事があつても……」と彼は問うた。

○唯今では、先づ火の見櫓や、火の見階子が御在ません。飛行機で始終見廻つて居ります。

○それで、昔は、手強蒸汽が、自動車と振回りてあ[illegible]

○いゝえ、飛行船は、[illegible]して、火事のある上で、一時に[illegible]飛行機[illegible]ます。三四[illegible]あれば、お概消えてしまひます。

○ある程、それは、其方が早く、火事は、減多に、出ないから、御在ません、のですが、[illegible]

時々、[illegible]消防者が、有つて、イケません。[illegible]ふのは、直ぐ、注射を、命じられますのですが、[illegible]

○成る、火ですから、すぐ、いえ、直に、中飛行中、[illegible]農薬を、吸ひ、て、撒てますで、[illegible]

○それは、お都合ですふ。

○云つて、居る、間に、既う、豁河台へ、帰つた。

○火事は、近所が、つたが、既う、消えて、空中、消防隊は、既う、引揚げて、ます。

○火事の、方は、消えたが、心の、底の、火は、まだ、消え

おいと翁は　ふくれた。

□帰って見ると、三間家の内部騒ぎ、一事件持上ってゐる。

□聞る夫人は泣入ってゐる。

□怒る老夫人は怒り立ってゐる。

□山一郎は苦笑してゐる。

□中助は困りはてゐる。

□花枝嬢は心配して。

□どうしたのですか。何事ですか。何の問題が起りましたのですか。と問うて廻るが、誰も答へない。

□翁は心配して。

□どうしたのかね。

□中助は苦笑しながら。

□まあ、話すまい事です……まあ先生此方へ入ってゆっくり下さいまし。芝上でお話し致す事。と云つつ、別室へと導びくれ。

□何事ものぬ。

□やっぱり馬鹿な事で。俺が病気罪りでしたんですが……

□山一郎君が病気？　何あの通り元気さて

るのもいゝし、主人は泣いて、阿母さんは怒って……

○そんがで内在ます淫気とふ病気が起りて……

○それは不都合だ……と三吉怒って兄に、弟子の清子と不都合で無い事も無いので、一寸後の白が出そびれた

○いえ、維今の世に内緒で一寸手元の紙を取り換へて、保の手紙の事が轉がって中の真と手紙が出て……

○保と真と手紙？

○それが世情、女優のもの……

○と小一郎君と女優と特別の交際で有るのかね

○いゝ為に一寸有りそれのもの……

○女優は品行方正の筈だが……

○それが外国の女優で、素行放埒で肺病で有るのですから、性質が甚だ宜しく有りませんので……

○併し、小一郎君の方が思想健全なるは、ちゃ

あでなるべき筈ぢ

○それが何分若い時でして、幼稚園女優の色香に惑溺して仕様が有りませんでしたから、早速国立病院に入れて、鎮静注射をして貰ひまして、全く[illegible]品行方正に成りましたから、安心してゐますのですが……最近又旧態再発と見えまして……

○それはイカン。早速又注射する必用がある。

○それと同時に、めづかせ位の事で泣いたり怒ったり癇癪。ヤキモチを焼くといふ事は悩みとして無くてはならぬ。悩みは同情れ

悪事。甚だ恨めしいと存じます。昨車にて、一寸国立病院まで行って来ようかと思ひます

○それは立派過ぎる。少しも早く車にて行くべしです

○ハイです。先生も恰度暇の機会ですから、国立病院を作無観おさてはいかがですか

○うーむ。今日は止す……今日は断然止す！

○それなら先生、甚だ相済みませんが、留守をお

供や奉公人ばかりです、何卒宜しくお願ひ申します。

□貴方は、引受けん。少し早く行って来給へ。

四三

4 ゴチ 6

一不埒話の道理 一議題を上ぐる婦人 一然
以の如く怒って一腕倒の声 一お話を用ゐる
る癖 一後頭部が急に発達 一婦人の大力
一妻を愛力で強要が不可能 一

□後は お供と 備へ。

□其中で 武雄は 遊びに さて 家に 居る。

□既に 夕方に 客室に 居る 翁と 花村嬢と 雄二
人と 眠つた。

□先生、[redacted]祖母様や 両親は 何処が 不良い
のです。[redacted]祖母様は 東京の 病院へ 行って
居られて ……と 花村嬢は 心配気に 問掛けた。

□ふアる、何んでも 悪い 事です。へうの 貴嬢の
自然に 覚えて 来る 病気です。貴嬢が お嫁
に 行ける ……と 翁は 笑ひながら 答へた。

□お嫁さんを 取って 行きます ……

□ばッちゃん お婿さんを 取らんで 悪いでせう

□お婿さんも 取って [redacted]んです。

□で、結婚式は 来年 清水 さんで 仕方が 悪い

「ぢぢ」

「それは又 不幸諸を申せる様な事在ます

の」

「がと 獨身主義ですか」

「えゝ まア……へうすれでは……」

「獨身主義はお止しなさい。既る彼の武田

女史のおきゝ ですめえ。今日は於て獨身の悲哀を

認めたらよをですなぢ。勿論 あの人は別です。

あの人が嫁入りきれずに 貴方が有りません。又

結婚論者の中 誠題 よ上るべき婦人では無いので

すから……」

「実然 待を。」

「何んですか……」と一喝。

「吃驚して 翁は 振向いて見ると 然 の如く思

り顔の 武田女史が 突立てゐる。其後ろは

猫吉さへ 来てゐる。

「やッ……どうも こりは……」と 翁は 恐縮せ

ざる とても 保ずである。

「どうも これは……とは 何の事をすッ」

「どうも こりは……何時の間 来たのです」

「いくらか業腹でも誘惑されるのが女心
世癖　俺は聞いてゐます。妻を喧嘩ふかける如き
が能く聴える位です。妻が荒々しく入来
れば出来ず、お聴える成るものです
が、それが何んです。善中は成て花柳界と話し
ぶんで居るとッて、そこで！」
「はて、私は此頃反語を用ゐるのが癖よ
成ですんですから、つひ貴女の事を喧伝しさし
れ。併し心中では貴女達の獨身論は敬意を
表して居ります……」

「ぼくは加藤の事を信有い」
「猫ちゃん進みます。」
「そんな　テレ隠しは明治時代で通用しな
んよ」と冷笑つた。
「まア先生、そのる貴男は確かに精神異狀
がお有りなさんですよ」と女史ヅケ〳〵云
ひました。
「えッ精神異狀？」と男は急所を突かれ
て慌てビックリした。
「旧態再発ですね。ここは恐らく色情系統の狂

ものをまづでつるものを知らせんぬ

○そ、そ、そんな事は断じて無い

○いえ、妾のそこなでは、後頭部が気を発達あさう

れ様です。事を由うと貴翁は今、花柳界を対

して変の事ぢや お詫し掛けまさてそのれんでせ

う、

○そ、そ、そんな事が有る筈が無い 詫すとすれば

現行犯で無くて、密会中往来の稀なる甲州を一緒

に歩んで時る……

○あ、其時なるて 降くいのでせう と猫吉が

○けんぢ。

○や、若し僕の知らない間に、空中飛行中の諸

話を聴き取る機械で発明されたい限りは、貴

女方に偽るわけが無い と翁の芸へは益々要

領を得ない。

○どうも貴翁は脳の一部に鉛隔をせられる

相毒ありやせん。さア之から直ぐに国立病院に

入院しなさい と云ひつゝ、女史は翁の方の腕を

攫んだ。

○さア本統に入院しなさいよ。早く注射をしないと

コダラ〜て
大事ッて風りそうなる」と猫吉の左の脇を
攫んだ。
□二人とも脇の力の強いのは驚ろいた。
「そうだ〜そこ二人とも」
「成るほど力が強く
成ったのです」と羽は問はずがたりをみられたい。
「今の婦人は、皆服藥の上、俗ぶ力は持って
居りません。既抗すれば モット力をだして居ます」と
女史は云って晩餐
「成ると、お婦人達の場合、色人が毒を意力で
強壓する事は不可能と成ったのですか」

「勿論です！」
「嗚呼、どうも、こりゃ」
□意力をもって 邸内の人と猫吉とは、嗚呼 翁
を引立て、会場 跳行機を無しと国立病院指
して急いだ。

4ゴム

□日本政府の事業として、国立病院の監督が
最も[redacted]主なるもので、国民の不健康者[redacted]

小 工

[illegible]を[illegible]根治する[illegible]後は自然と国運が発展して、従て、世界の平和をさへ維持する事が出来るのである。

□それ故、首相閣僚各大臣も常に式部へ出張して、万事に心を配てある。

□全国に多くの病院はあるが、最も完備してあるのは[illegible]東京のである。[illegible]場所は武蔵野の一部で、構内は三十萬坪あり、東京坪数に少しかゝる。

□世間へ近頃評判の[illegible]翁が来んとかいふ、直ぐと

又導は[illegible]ません。

□何の処が悪くつて来れのでせうか。

□さア それは何ともいふ。昔は時代の変化し[illegible]処へ行くと能く病気を起こしたものですが、今では そんな事は無く治ります。それは時代の変化を受けて、発病しないのも知れませんね。

□それは[illegible]知れませんね。アハ。そんで 零度以下の処へ行く、冬は百度以上の処へ出てまいんのと同じ様で、結局、時代の変化をうけ[illegible]

ですから、大概の人は病気を成りますよ。

□新しくふのは悪い方で、中古は次の様に導きてある。

□翁なる者、文明の赤が全く真髄を得ざる時代にて、純金隆盛の傾向あるを認め、憤慨の餘り『金』を吉つたのでは、伯東拙齋が首陽山を隱れ、遠に悪に対する心を懲らしてすると、民家の炉を拓かつれば、人物が小さいです。それが今度悔朝して見ると、世間の理想『国』を成つてゐるので、恥ぢ耻ぢで、それで神經を痛めたのも知れません。

□導は偏し翁の耳、まは人間悪者の腹の色を見て驚いた。

□白衣ばかりと思つたら、赤いのもある。青いのもある。黄色、紫、水色、黄色、緑色、絵を描いてあるですよ。赤いのも青いのは鄙俗浮みたるし、黄色ふんか流行病然でも笑い山

□でも社会が有りますん。あれを病質の医師が来るのです。黄色ふんか、あの真赤ふのも著せられますよ。

□入院患者8名ばかり寫庭に横はつてゐるとふのは無い。

□それで銘々勝手に運動をしたり讀書談話それは適度。

□和意味に於て囲を極端は、酷薄であるが、又倶樂部の様なものである。

□前に述べた院に注射を終つた三角一家の人と廊下で出逢つて。

□まつ先に如何してゐるかいつれのですか

当羽は左右の二人を見かへりつゝ。

□私を無視して張つて来たのは[redacted]さん二人の話振りから病院が有ると思ふから序でに側頭して覗ふのだと

□然るに云はれれば当羽の立場が無い。

□世間へ又、内閣總理大臣極德圓滿氏が来合せた。

□マア婦宿さん、古屋お若くお成りでしたね。

何処かお悪いのかしら、早速寺副室で測頭さしてゝゝゝと名せて言する[redacted]を元分に表して居られた。

小工

同

や、室は特別で無くつてもよいのですが。その病所の発表だけは見合せて頂きたいのでございます。

翁の頭を知らず〳〵下つた。

4ゴチ

復元して直の国士―懐中に耐えぬ―臨時結婚議会―日比谷公園―偽聴線―興味―すり苦味―緊急動議―特別結婚法―楚囚清談―進行博士―ちん俗紳者

□翁が入院後の経過は絶体に秘密であつた。

□一週間して退院を許されて、三浦邸へ帰つた。

此翁は、別人の様に変つた。否、別人の様に変つてゐるのが全く復元して、直の国士せる俗

古郎は立腹して居た。

□安楽椅子に掛けて、一人で考へて見ると、如何にしてあんな馬鹿ふうをしたのか、吾身ながらそれが信じられない。

□旧態自然病の恐るべきを初めて気が著いた。

□併しまた一方では、薬の性質まるで変つた。あれ程の狂的色情は全く去つてゐて、花柳巷の誘惑を見ると、漸次に耐えられない。

□伝んぢつて言ふ孫の種ふ少女を嬲りをし

れるか。常ろ不思議を感ずる位だ。

□世間へ小一郎[redacted]が入夢した。

□どうだね。君達の決財の結果は見物だね。

□小一郎[redacted]は恐縮笑ひを浮べた。

□時に先生、本日臨時結婚議會が開けます。

□えッ臨時結婚議會？

□元の古神宮殿で議事堂が出来ます。

□やあ、まだ退院間も無いので、少し退儀だ。

□まア止しなさい。

□それなら傍聴線を取りなさい。

□傍聴線とは？

□議場の発声が細大漏らず聴える線を、特別電話線が急速に引かれる事になりました。

□おやア[redacted]聴いて貰ふのかね。

□小一郎は心得て去った。

□入院前の病状、結婚と云ふ問題は当人の興味を有するのだけれど、今日では興味どころか苦味を感じて居るのだ。

I

□少時すると、工夫が入来りて、室内より蓄音機の喇叭を小形[illegible]の[illegible]を室内電話の一部より取着けて去つた。

□間もなく其発声機より

□議長！議長！議長！と云ふ鋭い叫びが御聞きせられた。

□既う議会は開かれると見えて。

□ナレ番！

□えゝ緊急動議に依り、議事を変更[redacted]

[redacted]本員の最[redacted]

[redacted]感謝する処で有ります。其所で

で、その八百八番の提出された特別結婚法で有ますが、本員は之を極賛成で有ります。夫婦間の無差別といふ事は、非常に有益であると信じます。

□待つて下さい。事務八百八番の原案を録して説明が無い内に、先走りして賛成演説が始まりては困ります。

（御声）御尤も至る（）

□議長！[redacted]

□三十六番、何んですか。

□説明する何も省略して直ぐ賛否を決立て
問うて見る如何ですか
□イヨー（生行傳士）と云ふ者あり。
□では然う云ふ事にして、早速法を取る事
□ヒヤ〳〵
□賛成と云の声聞える。
□えゝ、年齢無差別と云ふ事は落着一致で
□可決致しました。
（拍手聞ゆ）

室

□其所で日程に入りますが。えゝ、最近三十
年目で伊勢新聞社が新聞紙の試験を、是非
新出人を迎へる様に勧告状を送りたい
と思ふのですが如何なる方
□異議無し〳〵
□それでは後の出人、候補者を選挙して置きたい
と思ふのですが如何でせう
□白鶴〳〵
□何方か その候補者を挙て呉ぬい
方法か適当の人を指定あれば、それに決して

指法等の又別の指定が無いならば、
帳簿を操って其中から出します。
□議長！議長！
□六の六番！
□それは誰様と云はるより、三浦中助君の令孫、
花柳嬢が居かと思ひます。
□此新手で聴くれば耐らなく成って、嘸かし筆へ
今を当て。
□まう、それは云はるいで呉れ給へ。今では赤面
の事ですから……

小室

□それ[redacted]で聞る紗女が無い。傳聴線の発声は繊く。
□その三浦中助君の令孫は何歳ですか。
□はい十七歳です。
□十七歳とおっしゃ一歳、ここに大分差が有ります。
□併し、その位の新記録は造ってもよいかと思ひます。
□議長！議長！
□三十三番……
□本員は大変賛成であります。それからもう一人
の方の通告してある女史の方がよいと

思ひます

□公羽は今を振てゐる。

□イヤン！イカンヨ……

4ゴケ　6　過

一行

簡單な——一樂同情の涙——白票黑票

——該員全体を入院させん——門下生の書該——

銅像——國家の幸福——龍中龍を住居——生ける

一行

□斬く義塾、雖然……と……と聽ける。

□張長の声で

まぶけ他は俳優諸者は有りませんか……無い

樣ですね……すると第一俳優者、三浦花柳嬢

が行方不明公羽の新妻人の過去をあるか。其説明せ

室

二の六番めろ……

□そんなです。扨三浦花柳嬢は、花のやうなまつし

き姿の少女で有りまして、又性質温良、慈悲

心の富み、其の性格でして、学術も優等

です。

□幕間唱歌

□義子如何にしてゐる兄のがす事の出来ないのは、

公羽と花柳嬢とは親密なる関係と有りまして

有りまして、先日の同舞踊会の当方面の

試みられたと云ふ事にて有りまして……

□前は頭を抱へて。

□あれは誰、その……第二回目にも過ぎたあの

で、能楽堂の方より何んの意志も無かつたのが

□と云つたが、それが謡曲を面白る謡でも無い。

□今度は三十三番、成内女推蔦の演説が

有てばいと思ひます

□エヘン、扨も成内名桜女史は、と申上げる

□く、嬢ん異の名舞で有ります、イヤ、

紫てはイケません……世界で知る方面かる内

悔を聞きます……れ此では、女史の獨身は失恋の

の結果であり、世失恋は鳴浦翁が他に伝儀を

[redacted]おめられる依りとくふる若てそは誰か掃同陽

の後方の[redacted]で……

□紫声郎嬢は起て、三十三番の演説は能く聚え

ふく風つれ。

□[redacted]緩諦終結、終結！

□婦人の声が高い。

□それでは[redacted]の番説は蔦風の方は[redacted]白

三十三番説は蔦風の方は黒要る時扨下さい

と謡義の声が。

室

□いよ〳〵[illegible]が始まるかと聴くと聴きます。

□[illegible]内閣の実力？

□三浦[illegible]？

□世[illegible]羽は聴くとすぐ[illegible]

□然[illegible]て[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]内閣の実の[illegible]決議[illegible]

何[illegible]

[illegible]

[illegible]全体私は妻帯[illegible]

んと問題とする[illegible]間違[illegible]議員

全体を入院さ[illegible]射する必用がある」と

[illegible]話し[illegible]

□世[illegible]へ[illegible]中助が[illegible]

[illegible]先[illegible]少し[illegible]相談[illegible]事が出来

ますので……

□[illegible]は[illegible]結婚[illegible]事の事が中助の耳に入つ

れば[illegible]と思[illegible]捗りが悪くて[illegible]

ない。

曰 何かぬ
曰 ア 勝樹へお樹り下さる
□ 二人並んで勝樹より身を避けた。
曰 実は先生、これは私ばかりの意見ではなく
在学生の門下生が皆集まりての相談で出在
ますが……
曰 はー、それは……
私の方では何時でも先生に居て頂くのを
光栄と存じますが。それでは他の門
下の者も然うして頂きたいといふ風で、まア結局
先生を引張り紙幣とくふ有様で……それならば
一度の事、先生もう仕方を新築する説
もあるけれど、いくら連盟会員今日
で、新築する新築するには何んぼ多いでも
の中の彫像を先生の出征とした
如何がなるか然うすれば、つまり、せめて銅像を
建てると同じ事であります。又記念館へ行けば
何時でも先生をお目に掛れるといふ譯ですが先
生の市会へは如何ですか。

□ 鳴海[illegible]翁は記念館の館中館に入って、其所なる
[illegible]銅像として保存する事に成った。
□ 三河野郎よりは出入し易く成ったので、旧門下又
代知己生徒達を誘問し来って退屈はしない。
□ びけれども、如何
が無い。
□ 毎日親しく接する人の顔が少しでも増えて
ぬと[illegible]ると、[illegible]
それは俗し、中助[illegible]
[illegible]ふ[illegible]雄[illegible]……花柳界を蔑

□ ヤッ、それは至極結構だ。私は何時でも此
方の応分の助力を惜しまぬ。
此で……
□ いえ〳〵、手前借では何時迄も居られ
て頂きたいのですが、周囲が許さぬ事情
それで申上げたのです……
□ や、結構だ。記念館の方へ早速移ることとして
□ それでは[illegible]
4ゴ4 6 行
岩室を感じて——大給侯の議事——絶叫
大臣秘書官——内乱——最命反対の一味徒
黨——絶叫の為ふ方へ集まる——晩餐反対
弾——日光廟焼討は困る——
人一行

曩の共同宴が開いのである。

□まづ注射が加へられたのか。

□又旧態に復したのか。

□それとも彼の縁金の法論は如何に成れのであるか。

唐氏が無く、新聞で見る発表を見るの肥る鑑れぬ様にしてゐるのである。

□それで思ひて、新聞の綴じを一時寄せて讀んで見ると、高田の妻と三浦花枝嬢とは気に接て、接吻上、大結婚を遂げて世間

結婚論会は、一時停止する即ちふ紀事が有つた。

□妨ふ場合は行知へ旅行して気を換くのが好いのである。

□伊勢参宮から、京、大阪、中国、四国、九州、それから朝鮮、滿洲へ渡りて見物する服行旅行では何日掛るあらう。然るでしやう。考へて見ると、北海道、樺太迄行つて来たい。

□折柄、首相伯爵の秘書官、富貴栄彩と云ふ若紳士が首相代理として訪問し来れり。

□実は、首相の内意を受けて私が参りまして
れのですが、是非とも貴翁に承したい事が出来
上りまして……
□あゝ然うですか。
□事は世間一般に発表致して成りませんが、実は内乱
が起りまして……
□内乱？　それは怪しからぬ事である。明治十年、西郷隆盛
氏と内乱とは仕事である。此度の内乱は康熙時代の
新政厚德の反抗を最後として、
日本の内乱まで有る様で無い。其後、

台湾に於て旧支那人系の間は、然るに不穏の企て
が有り様なれば事が有る。又彼の甘藷の如きは、
山岳深く隠れて皇威[redacted]る年久しかつれ
が、それを注射の結果、悉く帰順したと傳へ聞
く。南洋諸島の有力種族、占領あつて日本人
数墓の意を表して居つたのが、それが内乱とは
仕事が始まる日本開闢の始まり迄、蹂躪、国
極土強、佐伯さんどの意義が極島して居つたの
は事実であるが、白皇祖の御神威[redacted]は陣代して
悪くその……

○先生、市言葉中ですが、少し脱線致します

○だって内乱が起つたといふことは有ります

○その内乱といふ意味が皇家を脅する勝せ

ふいのとんでもないのではありません。それは忠良

ある臣民は相達無いのですが……

○それで内乱とは何ですか。

○つまり政治の人命を殺しまして徒党を作

り人数を集め、その陰に隠れて戦闘を始め……

○そこ、それが動ちゃ内乱……

○なるほど聴き下さい。その内乱の動機が百

いのですが

○どんな動機で……

○どうも、人間の寿命が長くなつたので百

歳以上の者は、退屈で仕様が無い。せめて

は人間の百年を縮めて打切つて貰ひたいと云ふ

請願をしたのです。一国体が出来ますで……

○考へをしたことがあるのは

寿命の制限状態で、脳の一部を鉛点をまで

てあるのです。

左様です

早速浪射を命じられましたが

その浪射を嫌って、一団体球を求め山中に立籠って、ひそかに

山中へ立籠って、やっぱり不心得千万。

何処の山かね

金剛山千早の城跡へ籠りました

城を考へたのです

その方は参ればいいのですが、一隅は日光山に籠りました

すると幕末の浪士が大鳥圭介さんを隅長として、日光に籠れ御を踏襲したのです

実に固くひきました

直ぐ兵をやって討伐しなければいけません

世界の平和に乗じ、武器の心用を調べて、各国共に兵器は優ってひきました

で、烏合の賊を討伐する位の兵器は民間に骨董品として保存してあります。それを集めて間に合ひましたんです

それを集めて攻めて御覧なさいです。向ふは喜びま

何ぼそを
元来長生する原きてゐる連中で、少しも早く
死ぬことと思ってゐますから、養施されば
喜んで、その施薬の恩ぶ方へ集まります。
成程好き嫌ひ
[redacted]政治工場を設ける機械で睡眠
反抗を悪く眠らせて、
原爆弾を投下し
そのを[redacted]直ちに病院へ運び出す強制
注射を施して頭脳を治しやるとふ事です

それは妙案が
処が百一そんな事をすると。然しては、日光殿
廟を焼拂ってしまふといふのです
世界的建築、美術の内陣をどうん
る日光焼討は、いよいよ成りません
其所で初めて先生を学ぶ者が成りません
ので、そんなら降伏、日光まで降伏張
を頑ひたい。そんなの人望と、先生の雄辯、強者
最近は不老薬を目上ってとふ関係もあれば
ますます、蓬矢くは、そんなら防衛学を頑ってとふ

首相の希望を下ス……

曰く。引受ケテ……

4ゴ4　6

四四　七

一行

□副官ト……

日光ニ飛ンデ。

□副官　岩山頑骨ト　華厳の滝の上ニ舎ル

ス事ニ成ル。

曰何ンガ嶋庵ニ来ルノカ　山と岩

山頑骨ハ翁ヲ眼下ニ見降ル。

副官―華厳滝上の舎見―一門僧の五十年ニ

陽ル―性然ふ腹ロ―一寸興奮―ハ

ハリ―後世の史家ハ翁ヲ―純ヲの様説

―お論争ニ成ッテ―日光ニ飛行機五しー

□そんな仕方ガ無い。岩山ハ翁の先輩ナノデ、

本年百十五歳ニ成ル。

曰　ヤア貴方ガ[redacted]

曰　お前の様な若い者ガ

反乱者の隊長ですか

若い者ガ我々を馬鹿ニ

動目ざワよ。最少年を頭ニ

ガ聞ケバ聞クほど

お前ハ軍隊の様な

女と結

婚シテ

ヤ。ん間若い時

一度すれば澤山だ。既ニ百

を越シテ居ル。アキ

ル。

山と何処ニ

高飛車

I

□ 本統を聞きたいもの」

□ 聞くよ。人間誰が五十年と云ってゐる頃の方が

婦かつよい」

□ でも名士が早死すると皆惜んでは居り

ますんが」

□ 惜まれる間が花ぢやよ」

□ 無駄でもあるめえ」

□ 何者が邪魔ふくらぶれば

□ これでは聞くものと前は気を取直して

□ それ程長生を願ぎたのもの皆自殺をする

如何ですか」

□ 自殺？」

□ 今の者を驚かせる程の事を為ようと思ひ

ますが面倒で」

□ 堪らぬ時は身の寄所は投身の事

場です。華嚴の滝壺へ飛込んで死んでもよい。

如何です、私が金を上げようか」

□ 成りやアいいん」

□ 何故ですか」

□ 何故ですか自分で死ぬのは感心しない」

□ ぢやア今晩命は惜しいのでさう」

「実は命が惜しくないのぢや」
「それで何故内閣ぐんかを起して見たんです」
「解り天下太平で思ひ過ぎれば、一寸は」
「で興奮者として、一種言ひて見たんぢや」
「悪い酒落です。這んふ人騒がせをするのは」
「いつまり貴老方の頭脳は黒枝をもぐれのですか」
「早速下山して酒肴をもらふ」
「実は然うは思ひたくないでは、おかつてんが勝ち」
「イキいりの這んふ事を言ふ。敵。敵。大行」
「で政治の事を挙げあつければ問ふん様」

「成つてのぢや」
「それは既う昔の古今を問はず、洋の東西を」
「論ぜず、大とふく小とふく、衝突争闘を」
「なぶるのは、昔からのふい、イキいりのふ妙すつんのぢ。」
「後世の史家は、置屋を絵を描いて説を附して事を」
「大仏花道を取ぢらすけれど、元の話りは詰るふ」
「抽象してすすめて」
「然う達観ん事を云つてはイカンよ」
「斯うしてやう。貴老と私と此所で古論事を」
「結果、矢張り私が勝つてふ事にして、」

いえ美しい香りの花を持ちて下さい。それで貴老方一同接降ふ事うして下さってはいけません

□ 山

□ 山

□ 山

□ 昔は香りの高い花が有ったが、今では熱海の温泉場ぢゃアまア、名振で日光見物ずーして無ちゃ

しとふのが世界の大学者の評判である。中禅寺の湖水は潜水機で見物する世界の大学者の評判が始まって萬歳である。

□ 容易な設備が始まって萬歳である。

ナゴヤ

□ 内外の鎮定―世界大学校―各新聞

一青年の讃辞―首相の月下氷人―頑強

ある動毒無員―世界的大発明者話問

―日本の世界へ―君か―

□ 内外の鎮定したとふので、首相の評判益々高くなってゐる。

□ 世界は婚姻を無事に済ませて置くのは惜しいと成って、世界大学校長より任命する事に成った。

□ 世界大学校は、各国から日本へ遊学の生を一纏めにして、日本語から始まって教授して始まるのである。

□故[illegible]中、最初の間は、強壮、士、勤、人と、他の聯合国人とは、睨み合で、甚だ不和であるが、[illegible]れ、流刑されたりする。又元の四海兄弟と成る。

□谷羽が此方落梅の長[illegible]は、遍林を遍歩する得[illegible]、谷新国一[illegible]を[illegible]れ。

□此時に当て、又[illegible]を例の結婚議会が開かれて、是非とも花枝[illegible]を新きんといふ勧誘使さへ来れ。

□待て下さい。まア、そんな問題は……

□いや、待てません。此事は福徳首相が

大賛成で、月下老翁と成つてもよいとまで申されて居りますと。

□昔、先[illegible]保隙や[illegible]保隙の勧誘者よりいくらか撃退して帰るの頑強ぶりが有つれが、勧妻と言ふのは珍らしい。

□番[illegible]と[illegible]定せられけれども、私は此頃考へてゐる事があるのです。それを実行した上でなければ、妻を迎へることも迎へない定めです。と谷羽は切り捨てた。

「それから、それが済みましたらで、お待ち致しかしながら」[redacted]全体花婿の方の意嚮は「ですが如何なのですか

「それは又、係が違ひまして、他の委員が勧誘に参られる筈です」

「一方が承知で、一方が不服の時には如何いふ事に成るのですか」

「そんな事は御座ませんです」

「けれども、有つた時には如何なりますか」

「結婚議会が責任を負うて解散に成ります他は御座いません」

「や、それはどうもお気の毒な次第です」

□何んびか如何しても結婚しなければ成らない様な形勢に成つて来ません。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

□嶋浦の心着いたのは、斯くの如く国運を進展せしめ、文明の真髄を摘へ得れた[redacted]施設(インスチチユーション)の本尊本体が何人であるかといふ事である。

□発明者は名を書くのを好まず、絶てを
金社は一件で、自分は隠れてのみ、其行
動の雲ゆかしさ、幽冥に耐えぬ。
□此行くて又隠香を訪問し、老心かるの感
謝の意を表して、いと考へて、此事も福徳首
相よ謀つれ。
□それでは密かに私が案内して、其士晩明者、
平和の神の本尊に人香すると上げよう。だが、昼
間は人目が蒼蠅いから夜よ入って飛行機
で行くことと約束して別れた。

□夜よ明けて首相自から飛行機の運転台
と物の操縦席を乗って地上を離れた。
□早くも！早くも！
□行先は昼間膳する所。
日本の世界へ行くのでは有りませんか。と昼
を訪ふのでは有りませんか。
□さア然るかの知れないと福徳首相は笑
つてゐる。
□其間、翁は強いて光線を眼を打めて聞いて
ゐる事が世界に驚くべし。

□も思ふ間、何処へか行く者いな。

□日々！　日々の世界！

□眼を開いて見ると、ニッコリ笑って世所に立つ大偉人！

□おう、嶋浦君！」と云って握手をした。

□あッ、大発明家は君であったか」

□翁の能く知ってゐる人であった。

ゴムッリ　4号

（大園圓）